

候変動の影響が表れやすい生き物です。調査中に暖かい地方に出るきのこが見つかりましたが、近年の暖冬の影響の表れなのかもしれません。きのこの顔ぶれに変化をおよぼす要因のひとつとして、気候変動も注意する必要があると思われます。

3つの要因のなかでも、林の変化がもっとも大きく影響を与えたと考えられます。今後、雑木林が自然林に近づく速さはゆっくりになると思われますが、きのこの種類はさらに変わっていくと考えられます。

謝辞

きのこ調査は高島利男さん（富山市）と共同で行いました。昔のきのこについての貴重なお話は、松崎正信さん（三熊地区）、今井 博さん（山田地区）にうかがいました。心からお礼申し上げます。

文献

里山(富山県中央部)の自然環境調査報告書Ⅰ（富山市科学文化センター）。
富山県統計年鑑。
富山農林水産統計年報。

里山で見られるコケ植物

坂井奈緒子

コケ植物（以下はコケと略します）は、体全体で水を吸収できるしくみと小さな体のおかげで、土の他に、コンクリートや石の上、木の幹や枝も生育場所にする植物です。地域や標高によって生えるコケは異なりますが、ちょっとした環境の違いによっても違った種類が生育します。

里山では、どのような種類のコケが生えているのでしょうか。富山市三熊地区で調査を行いましたので、全体の様子と代表的なコケを紹介します。

◆コケの豊富なところと種類

三熊地区は谷に沿った土地で、上部に古洞池などのため池があり、下流に人家や田畑が連なり、斜面には雑木林やスギ林が広がっています。コケは、古洞池周りの雑木林の遊歩道沿いで種類も量も多くあり、切り通し法面、石の上、木の幹や枝、倒木の上によく生えていました。そこは、半日陰で、朝晩には少し湿る環境でした。その一方で、雑木林の中に入ると、ほとんどコケは見られませんでした。林の中は暗く、足下では草木が茂り、落葉や落枝が厚く積もっていました。コケが生えていなかった理由は、生長に必要な光が少ないうえ、落ち葉などでコケが埋もれてしまうためと考えられます。

アカマツ林やスギ林の中では、コケの種類は少ないながらも、アカマツの根元にはウマスギゴケや乾燥に強いカガミゴケが、スギの幹には白緑色のホソバオキナゴケが豊富に生育していました。

林で見られたコケの4割ほどは、道ばた、田畑、家の庭といった明るい開けた人家周辺でも見られる種類でした。

人家周辺では、林と共通するコケの他に、ギンゴケやヤノウエノアカゴケなどの明るい場所を好み、乾燥に強いコケが生えていました。

三熊地区では、全体をととして小型の種類が多く生え、111種類のコケが確認されました。富山県の里山に生育するコケについてのまとまった報告がこれまでにないので、他と比較することはできませんが、調査範囲が狭く、林内は全般的に乾燥しているため、記録された種類は少なかったように思われます。しかし、里山でよく見られる種類の多くが確認されました。

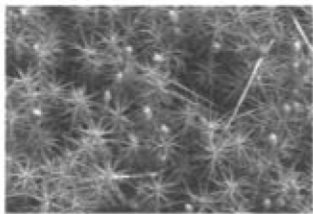
◆春に目立つ雑木林のコケ

雑木林では、若葉が萌える前の春先に、胞子体をつくるコケが特に目立ちます。木の幹や枝に生えるノミハニワゴケは、赤褐色の胞子体を伸ばし、まだ色味のない雑木林で鮮やかです。切り通し法面では、エゾミズゼニゴケのまるでモヤシのような柄の胞子体が見られます。

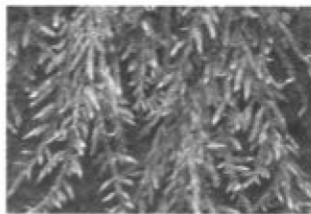
山が新緑につつまれる頃になると、胞子体が伸びてきたハミズゴケに気づきます。そして、倒木上では、クサゴケが多くの胞子体をつくっています。

◆ため池や田んぼのコケ

秋になると、ため池の水は減り、岸に泥地が広がり



ウマスギゴケ（アカマツ林）



カガミゴケ（アカマツ林）



ホソバオキナゴケ（スギ林）



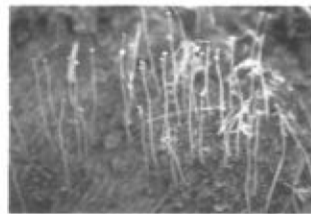
ギンゴケ（人家周辺）



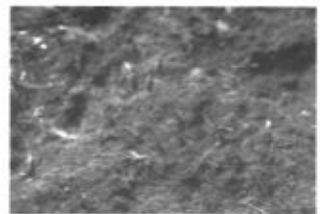
ヤノウエノアカゴケ（人家周辺）



ノミハニワゴケ（雑木林）



エゾミズゼニゴケ（雑木林）



ハミズゴケ（雑木林）



クサゴケ（雑木林）



カゲロウゴケ（ため池）

洞池の岸に生えたカゲロウゴケは、まさに陽炎のように10月から雪が積もる12月中頃までの短い間しか見られない長さ1mmの大変小さなコケです。ため池などの干上がった場所という限られた環境で生育するので、比較的稀な種類であると考えられます。

ます。稲刈りが終わった田んぼは、泥の裸地になります。コケの多くは多年生ですが、そのような環境には、秋から生長し、11月下旬には胞子体をつくり、春には見られなくなっているコケが生えます。なかでも、古

謝辞

庭と田畑での調査の一部は高橋政則さんの所有地で行わせていただきました。心からお礼申し上げます。

自然とともにあった里山の暮らし

坂井奈緒子

燃料革命や高度経済成長の波が押し寄せる昭和30年代以前、里山の人々は、生活に自然のものを多く利用していました。ここでは、人々がどのように周囲の自然を利用していたかについて、当時のことを知る方からお聞きし、また文献などで得た富山市山田赤目谷地区と三熊地区での様子を中心に紹介します。

自然素材でできた住まい

山田赤目谷の家屋の周りには、強風を和らげるためにスギやマツ、ケヤキが、食用にカキ、モモ、アンズ、ウメ、クリなどが植えられていました。

家の屋根はカヤぶき（カヤはススキのこと）でした。赤目谷ではススキは急斜面に多く生え、ススキ採り（地方名でハネソヒロイ）が雪解けすぐの早春に行われました。ススキは、大切な現金収入にもなっていま

した。家の壁は土壁で、その骨組には、細く割ったマダケやススキなどが使われました。家の柱はケヤキが最も良いとされ、大黒柱にはケヤキが用いられました。玄関に入るとニワと呼ばれる土間があり、その隅には馬納屋が設けられていました。ニワでは、収穫物を処理したり、農閑期には農具を並べておいたりワラ仕事が行われました。板の間に敷いたムシロの上で日常生活が営まれ、法事などの時だけは、座敷に畳が敷かれました。多くの家では、茶の間と広間の2箇所には炉があり、暖がとられていました。茶の間の炉は、炊事の間でもあり、炉の真上のシヤマという枠からつり下げられた自在カギに鍋をかけて、煮炊きがされていました。プロパンガスが普及するまでは、周辺の山林から採られた薪が、燃料として利用されていました。